



# 駐車場コラム



## ■ モビリティ新時代の駐車場革命

一般財団法人計量計画研究所理事 神戸大学客員教授 牧村和彦

### 欧州でブームの新しい駐車場「モビリティ・ハブ」とは

世界の駐車政策最先端都市はどこかと聞かれれば、間違いなくドイツと答えるだろう。ベルリンでは、街中にJelbi(イエルビ)ステーションと呼ばれるモビリティ・ハブを展開、この数年で180箇所を超える新たな駐車空間が生まれている。ベルリン市は、脱炭素化を推進していくために、路上の駐車空間をエコで小さい交通用のシェアリングスペースに転用し、都市内で数キロの移動に化石燃料を利用する人達を、小さい、電動化車両に転換する政策に積極的に取り組んでいる。その重要な都市の装置がモビリティ・ハブだ。まちなかには2万台を超える電動キックボードのシェアリングサービス、5000台を超えるカーシェアリングが提供されている。

従来の駐車空間をモビリティ・ハブに転換することで、車両1台のスペースに自家用車が長時間駐車しているよりも、多くの小さい交通(マイクロモビリティ)が駐車できるメリットがある。小さいシェアリングの交通手段は都市内では回転率が高く、何度も同じスペースを利用することになる。その結果、同じスペースで自動車よりも駐車収入が増え、街の来訪者も増えるといった好事例が欧州各地で報告され始めており、欧州でブームとなっている。

例えば、ブランデンブルグ門周辺の半径2kmエリアには、200m毎に小規模なモビリティ・ハブが計画配置され、24時間いつでもシェアリングサービスがご当地MaaSアプリのJelbi(イエルビ)から利用可能だ。これらエリアは歩道ではなく、車道の一部をステーションとしている点が特徴的であり、以前は駐車用の空間であった場所が多く、車両1台分の専用面積でマイクロモビリティが5~7台ほど利用可能となるよう新しい道路空間の活用がなされており、パークレット<sup>注1)</sup>の思想とも通ずる注目の取り組みだ。



駐車空間をモビリティ・ハブに転用した例(ベルリン、牧村和彦撮影)

## 不動産の新たな価値創出にも貢献する「モビリティ・ハブ」

ベルリンのモビリティ・ハブには2種類あり、小規模なタイプをモビリティ・ポイント、大規模なタイプをモビリティ・ステーションと区分し、先に紹介したまちなかに面的に配備しているものの多くは、モビリティ・ポイントである。大規模なステーションタイプは、駅直近などに自転車や電動キックボードのシェアリングに加えて、カーシェアリング、充電施設、宅配ロッカーなどを一つに集約した施設が一般的であり、人とモノの両方のワンストップセンターとなっている。



若者に人気のカーシェアや宅配ロッカー等もモビリティ・ハブに集約  
(ベルリン、牧村和彦撮影)

さらには、地域の不動産会社などと連携し、駐車場の空きスペースを有効活用したモビリティ・ハブの導入も都市のフリンジ部や郊外部で始まっている。事業を推進するBVG(ベルリン市交通局)では、今やモビリティ関係の事業者よりも不動産や都市開発事業の方との仕事が多いと聞く。先行的に郊外住宅エリアの最寄り駅に複数のモビリティ・ポイントを配備し、駅から少し離れた住宅地の駐車空間をモビリティ・ハブにアップデートすることで、不動産の価値を維持しつつ、利便性を向上するベルリンの新たな取り組みは、持続可能な都市開発のお手本になっていくのではないだろうか。

わが国でも気候危機への対応として、エリア全体の脱炭素化を推進していくための都市政策の一つとしてモビリティ・ハブを推進していったらどうか。温室効果ガスを発生しないエコな車両の利用機会を市民に提供し、まち中での個人用の移動のための車両を政策的に小さく軽量化しながら、まちの回遊性を促進していく次世代のまちづくり、駐車政策に期待したい。

注1)パークレット(Parklet)とは、路上駐車スペース等、車道の一部を転用して人のための空間を生み出す取り組み